主 題：パウロの願い

聖書箇所：コリント人への手紙 第一 1章10－31節

この箇所はパウロがコリント教会の人々に厳しいことを言っているところです。それはパウロがコリント教会の人々を愛するがゆえに言わなければならなかったことです。4：14でこのように言っています。「私がこう書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとして、さすためです。」と、愛に基づくものなら、聞かれ、受け入れられる、そして、それが問題点や罪であるならなおさらだと、パウロの確信を見ることができます。今日はこの箇所から、パウロがコリント教会に願ったことを学んでゆきます。

☆パウロがコリント教会に願った内容

1. みんなが一致すること 10－13節

当時、コリント教会には分裂分派があったので、パウロはあえて「一致」を求め、そして教えて行きます。

なぜ、教会には一致が必要なのでしょう？

1) 兄弟愛のゆえに、

10節でパウロは「兄弟たち」と呼びかけていますが、「兄弟たち」ということばは11節にも26節にもあり、パウロはそれを強調するのです。あなたがたは主にあって救われたのだから、主にある家族とされたのだから、互いに愛し合うものとされているのだということを思い起こさせるのです。I ペテロ1：22「あなたがたは、真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、互いに心から熱く愛し合いなさい。」とペテロも言っています。「…なったのですから」と、私たちはもうそのように真の兄弟愛を抱く者となったのだからと完了形で言っています。救われた結果、兄弟愛をもつ者となったのだと。また、ヨハネも「私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。」(I ヨハネ3：14)と、救われていることが分かるのは兄弟を愛しているからだと言います。もし、兄弟愛がないなら、救われているといっても疑わしいのだと言います。

また、10節に「主イエス・キリストの御名によって」とあり、「主イエス・キリスト」ということばは2、3、7、8、9節にもあります。私たちは救われてイエス・キリストを私の主としたこと、教会はイエスを自分の主人としている人たちの集まりであることを、1：1－9から私たちはすでに学びました。2節の後半には「主は私たちの主であるとともに、そのすべての人々の主です。」と、イエスはすべての人々に救いの道を備えてくださっているが示されています。

2) 神が悲しまれるゆえに、

分裂分派はキリストのからだの分割だと言います。13節「キリストが分割されたのですか。」と。私たちは神に敵対する者でしたが、救われて罪からの救いとともに、神につく者とされたのです。パウロ自身は救われる前、クリスチャンを迫害していましたが、それはキリストを迫害することでした。使徒の働き9：4「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」と、キリストご自身がそう言われていることです。また、救われた私たちはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官だとパウロは言っています(I コリント12：27)。ですから、キリストのからだである教会の分裂は、キリストが分割されることであって、それは神が悲しまれることだと言うのです。分裂や分派をつくる者は神に対して罪を犯すことだとパウロは言います。神を悲しませる大きな罪です。それは教会に混乱をもたらします。テトス3：10には「分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい。」と、すばやい対処が求められています。

12節には四つの立場が書かれています。パウロ、アポロ、ケパ、そして、キリストです。パウロはこのコリント教会の基礎を造りました。アポロはそのあとを引き継ぎました。使徒18：24－28にはこのアポロについて詳しく書かれています。雄弁であった彼は聖書に通じ、イエスがキリストであることを力強く語り、ユダヤ人を論破したとあります。ケパ、すなわちペテロは12弟子の一人で、リーダー的存在でした。そして、キリスト。11節によると、パウロはこのコリント教会の分裂を知らず、クロエの家の者から知らされたことが分かります。この四つの立場の違いは信仰の違いではありません。分裂分派はコリント教会の人たちが作り出したものです。彼らの信仰は同じ主に対するものです。3：9には「私たちは神の協力者であり、…」とあります。ですから、「みんなが一致して、仲間割れするこ

となく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。」（10節）とパウロは勧めるのです。

この「一致して」は原語から見ると、「同じことを話す」という意味で、立場を異にする者が意見を合わせるときに使うことばです。共同宣言です。「合わせる」ものは第一に教理です。聖書が正しく解釈されていること、また、教会の中でいろいろな意見をもったとしても、総会での決定事項には皆が同意して従うべきです。自分は違う意見だからと言ってそれに従わないことは分裂を生みます。

「仲間割れ」とは、「破れ、裂け目、ほころび」という状態を指し、それは恥ずかしいことだと言います。教会にそのようなことが見られるのは恥ずかしいことです。ですから、「同じ心、同じ判断を完全に保って」とパウロは言います。この「保つ」とは「つくろう、直す、いやす、整理する」ということです。これは自然にできると言いません。パウロは「どうか、みな一致して」と懇願しています。意識して合わせる、意志をもってそのように選択してくださいと言うのです。全員の協力が必要なのです。そして、無関心でないことです。私たちの努力を神は助けてくださいます。

II. 十字架のキリストを語る 14-25節

13節の後半から16節にかけて、パウロはバプテスマについて語っています。パウロは多くの人にバプテスマを授けなかったことを感謝しています。それはどういうことでしょうか？1) パウロに反対している人たちから自分の味方をつくるため、と言われたいためであり、2) パウロにつくという人たちからは、大伝道者であるパウロからバプテスマを受けたと自慢することにならないため、です。

12節で見た四つの分派は人々の自己主張の現われと言えます。ですから、パウロはコリント教会の人々をこのように戒めるのです。誇る人がいたから、1:29「神の御前でだれをも誇らせないため」、自分を賢いとする人がいたから、3:18「知者になるためには愚かになりなさい」、自分の力を誇っている人がいたから、3:21「人間を誇ってはいけません」、自分が王様になっている人がいたから、4:8「私たち抜きで、王さまになっています」と、思い上がっている人がいたから、4:19「思い上がっている人たちの、ことばではなく、力を見せてもらいましょう。」、誇り高ぶっている人たちに、5:2「あなたがたは誇り高ぶっています。」と、パウロはこのような人間的な思いに厳しい叱責を与え、愛をもって戒めるのです。パウロにはそのようなことはどうでもよいことでした。パウロは自分に与えられていた大きな務めに目を留めていたからです。

パウロの務めは1:17にある通り、コリント教会の人たちに福音を宣べ伝えさせることでした。「キリストが私をお遣わしになったのは、バプテスマを授けさせるためではなく、福音を宣べ伝えさせるためです。それも、キリストの十字架がむなしくならないために、ことばの知恵によってはならないのです。」と。コリント教会の一人一人がしっかり福音を語る者になるようにと、パウロはもちろん自分でも福音を語りますが、人々に教えてゆくのです。1:18に「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。」とあります。21節には「宣教のことばの愚かさを通して」と、23節には十字架が「ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚か」とあります。「十字架にかかったイエスこそまことの神である」というこの十字架を人々は何と愚かなことかと言ったのです。

イエスの時代、ユダヤ人は自分たちをローマに圧制から救い出してくれるメシヤを求めていました。ヨハネ6:15には「イエスは、人々が自分を王とするために、むりやり連れて行こうとしているのを知って、」とあるとおりです。そして、パウロがいた当時、多く的人是はギリシャ文化の影響を受けていました。人々を惑わす人物が出現しました。紀元45年頃、チユダという者が現れて奇跡が起こると言って、多くの人々を扇動しました。また、54年頃にはエジプトから一人の男がエルサレムに来て自分こそ救い主だと公言し、人々を惑わしたのです。また、ギリシャ人にとってもキリストを受け入れることは「愚か」なことでした。使徒の働き17:16～には、パウロがアテネの人たちにキリストの十字架について話している様子が書かれています。彼らは「死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たちは、『このことについては、またいつか聞くことにしよう。』と言った。」とあるとおり、十字架は無意味だと言ったのです。イエスが十字架につかれたことは人々には愚かなことでした。「木にかけられる者はすべてのろわれたものである」から、そのような者が救い主であるはずはない！のです。

しかし、イエスはこのような人々に、愛を示されました。また、へりくだりを示されました。罪からの救いを説かれたのです。

創世記14:14に「アブラハムは自分の親類の者がとりこになったことを聞き、彼の家で生まれたしもべども318人を召集して、ダンまで追跡した。」とありますが、この318という数字をギリシャ文字で表わすと十字架だと言う人たちがいました。パウロはIコリント1:17の後半で「キリストの十字架がむなしくならないために、ことばの知恵によってはならないのです。」と十字架に必要以上

の表現はいらないうのです。それは人間的であると。十字架は「神の愛と義を現わす」のです。18節にあるとおり、十字架は「神の力」です。罪から救い出してくれる神のその力です。パウロはここで、「愚か」に対して「神の知恵」とか「賢さ」とか言わず、「力」パワーと言いました。だから、23節「私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。」と言います。「つけられた」というのは迫害を示しています。キリストご自身の迫害とともに、キリストに従う者への迫害もです。しかし、キリストを語ることを止めないのです。1) たとえ、「愚か」と言われようと、2) たとえ、迫害されようと、とパウロは十字架のキリストを語るのだと、力をこめて熱心に教えるのです。

III. いつも、ほんとうの自分を覚える 26-31節

コリント教会の問題点は、

1) 救われたときのことを忘れていました

神は「無に等しいものを選ばれた」のです(28節)。これが神のみ旨です。救いは完全に神のみわざです。それを私たちは覚えるべきです。エペソ2:8, 9に「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです。」とあるとおりです。30節に「キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになりました。」とあります。私たちの罪の代価はもう支払われたのです。

2) プライドを持っていた

ゆえに自己主張があつて、そのために分裂分派が起こっていたのです。31節にあるとおり「誇る者は主にあつて誇れ」です。誇ることは神のみ栄だけであること、それが私たちクリスチャンのあかしです。